

# 工学系研究室の ワークライフバランス について

大分大学理工学部 助教

市来 龍大



専門はプラズマ科学。プラズマを使って窒素原子を金属にドーピングし、材料の機械強度や生体適合性を向上させる技術について研究中。

## 学生や院生のワークライフバランスを考える

この記事を読んで下さっている工学系教員のみなさま、胸に手を置いて考えてみて下さい。

組合活動では「労働条件を改善しろー！」とか要求していながら、研究室で学生や大学院生に必要以上の業務を強いてはいないでしょうか？研究活動がハードすぎて、体調を壊してしまう学生さんを見たことはありませんか？

私が経験してきた限りでは、大学の工学系研究室の多くが昼夜を問わず稼働しており、その傾向は研究規模の大きい大学になればなるほど強い気がします。どんな分野であっても、学問を修めるためにはつらい思いをして壁を乗り越えなければならないときがあるでしょう。

しかし過労が定常化し、精神や肉体に悪影響を及ぼす程度となれば話は別です。そのような際は我々の労働環境を改善するのと同様に、学生や院生のそれについても改善する必要があるのではないのでしょうか。

恥ずかしながら私は社会科学に疎いため、きちんとしたデータやアンケート結果などを挙げながら議論する力はありませんので、ただただ自分の経験だけをベースに素朴に素朴にこの件について語ってみます。有用な知識の提供はできませんが、読者のみなさまに工学系研究室のワークライフバランスについてより真剣に考えるきっかけを与えられたらうれしく思います。

## 根性論で研究していいのでしょうか？

工学では成果を出すために能力のみならず作業時間を要する研究が多いことが、学生のハードワークの主な理由なののでしょうか。

装置の真空度を向上させるために毎日毎日真空引きやベーキングに数時間かかる研究はざらでしょうし、数十時間にわたる化学反応を監視するために寝ずの番をすることもあってでしょうし、細胞やマウスを数週間世話する研究もあることでしょう。実験、シミュレーションにかかわらず、うまくいくパラメータを探るために何度も何度も同じ作業を繰り返す必要があるのも工学系研究の特徴です。

しかし、「作業時間を要する」という工学系研究の特徴は、国によらずどこでも同じはずですが、にもかかわらず、他国の大学と比べて日本の工学部が異常に忙しくしているように思えてなりません。

経験から言いますと、日本の工学系研究室には共通して、過度な根性論が文化として根付いています。徹夜や休日返上で長時間働くことに正義を見出したり、常に忙しくしていることを徳とする傾向など、「研究するためにそれって必要？」と思える非論理的な美学が存在しているのです。

この根性論を払拭することができれば、学生もそして我々ももっと常識的な働き方ができるようになると考えています。(根性論が大学に限らず日本

全体の労働問題に影響しているような気がしますが、ここではとりあえず大学の話だけします。それしか知らないの・・・)。

## 午後5時に帰宅する教授

**ど**の国がいいとか悪いとか一概には言えませんが、とりあえず根性論とは縁のない国の人の話をさせてください。

私の考え方にパラダイムシフトを与えるひと言を放った、ある海外の著名な教授の話です。私は彼と数か月にわたり共同研究をしたことがありました。その際に研究の大変さについて語り合ったのですが、驚くべきことに、その分野であれば誰でも知っているような業績をあげている先生が、「国では俺は毎日午後5時に帰宅している。」と言ったのです。当時の私にとっては、信じられないひと言でした。

さらにその教授はきちんと理由を示してくれました。「我々の学問分野には、女性教員や女子学生が少ない。その原因のひとつに、教員たちが夜遅くまで働いていることがあると思う。夜遅くまで働きたいと思っている女性は少ない。だから俺は多くの女性にこの分野に携わってもらうために、5時に帰る姿を周りに見せることにしているんだ。」私は目からうろこが落ちました。

根性論をベースに働いている研究者はおそらく「夜遅くまで働きたくない方が悪い。そんな人間は我々の分野に来なくていい。」と言うだけで、積極的に対策をしようとはしないでしょう。さらにそういう人々は、5時に帰宅する教授に対しても「楽をしようとしてるだけ」と罵りかねません。これでは何も進展しません。

それとは対照的に、この教授は根性論に一切毒されていない「5時に帰る」という手段を自ら実践して、問題を合理的に解決しようとしているのでした。この試みが功を奏したかどうかはわかりませんが、とにかく私は論理的な考え方に純粋に感動しました。(男女共同参画に通ずる目的それ自体も粹ですね。)

## 2週間の春休みの意義

**こ**れはほんの一例ですが、このような経験をいくつか経た結果、私は工学系研究室に身を置きながらも根性論を少し客観視できるようになりました。

「長時間働く」のが目的ではなく、「研究を進める」ことを改めて目的に据えて考えられるようになり、また「研究を進める」ために合理的に思考した結果、「研究時間を短縮する」や「休暇を取る」という選択肢も選べるようになりました。ということで現在私は自分の研究グループにおいて、学生に積極的に休息を勧めるよう試みています。

まず私の研究グループでは、時間を要する実験がある日以外は5時以降は束縛をしないようにしています。ちなみに、多くの学生がアフター5をバイトに充てているようです。大学生がバイトすることに賛否あるかもしれませ



研究グループの写真。後列左から3人目が著者。  
みんなストレスフリーの顔をしている！といいのですが…

んが、私はバイトも社会性を養うための貴重な人生経験かなと思います。それだけではなく、研究室以外の世界を持っておくことが（サークルでも構いませんが）、研究がうまくいかないような場合の心の拠り所になると思います。ところで幸運なことに、バイトに明け暮れて研究をしない学生にまだ巡り合っていない。

話が脱線しました。また、過酷な実験や学会活動の後には、2～3日休暇を取るよう学生に勧めます（講義はサボらないように！）。以前はこのような取り組みは行ってなかったのですが、休暇の推進により学生はより研究や学会活動に意欲的になった気がします。私はこれに気をよくし、今年からは卒論修論が終わった後にみなで春休みを2週間ほど取ることにしました。（私も会議の合間を縫って、何日間か有給休暇を消化します。）とにかく一度研究のことを忘れて、新たな気持ちで4月から臨もうという意図です。

このように、学生が過度に苦勞しないよう意識して活動していますが、学生の学ぶ意識や実践力が低下した様子は見受けられませんが、研究の進捗がにぶった印象もありません。この点、客観的に証明することは困難ですが、私自身もいろいろと試行している段階ですのでお許しください。

さらに私自身も職場で他のことに充てる時間が増えたため、教員のワークライフバランスも改善されました。まだまだ素人考えを吐き続けますが、休暇や休息は体や脳を休めるという意味だけではなく、学生の研究に対するモチベーションを持続させるよい手段でもあるような気がします。

同じ事ばかりずっとやっていると脳がマヒしてきて、やりがいのある研究をしても全く新鮮さや刺激が得られなくなってきます。時々休んでみれば研究を客観視する機会が得られますので、常に新鮮な気持ちで研究対象に向き合えるのではないのでしょうか。

短時間で研究成果をあげることは研究者にとって永遠のテーマだと思いますが、とにかく根性論だけは除外して考えてみることをみなさんも試されてはいかがでしょうか。

## ワークライフバランスは学生時代から！

**大** 学で学ぶ学生たちはいずれ就職先で部下を持つようになります。根性論ベースの研究室で「体を壊すまで働くのが偉い」と教えられてきた学生は、同じことを部下に強いるかもしれません。

これを考えると、研究室のワークライフバランスを考えることは社会的にも決して無意味ではないと思います。科学技術を使う人も、作る人も、そして作るために学ぶ学生も、みなが幸福を感じられるような世の中を目指したいものです！



研究グループの飲み会の写真。学生が自主的に開いてくれます。参加するか否かは自由！酒の強要もまったくなし！